伊藤痴遊全集

第一卷

昭和四年六月七日印刷
昭和四年六月十日發行

伊藤痴遊全集　第一卷

著者　伊藤仁太郎
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇
印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　株式會社　平凡社
振替東京二九六三九番
電話九段三六四七番　三一六六四七五番

（第四回配本）

萩原製本　共同印刷株式會社印行

序詞

一

維新の三傑を對照して視て、いづれを優り、いづれを劣れり、といふ事は容易に言明し得ぬが、政治家としての實質からいへば、大久保、木戸の二傑が、すぐれて居たやうに思はれる。若し夫れ、一個の軍將として視れば、山縣有朋、板垣退助の方が、或はまさつて居たかも知れない。また軍制上の權威としては、大村益二郎、津田出の兩人が居たから、單り大西郷のみを偉しとして、他の人々を貶すことは出來ぬ。

乍併、大局を視て、その急所を遁さぬ點と、人德の充實して居た事は、とても大西郷にまさる人無く、大久保、木戸の二傑も、此一事は、遠く及ばなかつた。維新の大勢は、此人あつて定まれり、と言ふて然る可きであらう。

誰れが視ても、大西郷は偉い、と言ふし、何人も、之れに對して、否と言ひ得ない所に、大西郷の人德はあつた、といふ可きである。

世間に、若し大人物といふものがある、とすれば、即ち大西郷其人の事であらう。

遠く離れて居て、一度も其顏を見ない人が、大西郷は偉い、と極めてしまふ。近く寄つて詞を交した者は、直に其風格に打たれて、頭を下げてしまふ。斯ういつた所に、大西郷の爲人が、偲ばれるではないか。

どうせ人間のことであるから、その缺點を拾ひ擧ぐれば、大西郷にも、批議すべき點はあらう。けれども、萬人が

視て、日月の如く、敬仰したのは何が爲めであらうか。此一事は、誰れも知つて置く必要がある。

如何なる場合にも、至誠を以て事に當り、赤心を以て、人に接する、といふ所が、大西郷の風格であつた。

政治を取扱ふ彼倆が、どれ程であつたか、といふやうな事や、軍事に關して、どの程度迄、すぐれて居たか、といふが如きは、抑も末節のことである。維新の風雲を捲起して、六百年來の武家政治を破り、王政復古の鴻業を爲す上に、最も必要なことは、之れに當る人の風格が、第一である。

大西郷は、偉い人物である。大西郷は、大きい人物である。後世、之れに比す可きものが、果して出るであらうかどうか、僕は、之れを疑問にして居るのだ。

我等の如き後輩、薄識の徒が、彼是れいふよりか、維新當時の人傑が、大西郷に對して、何といふて居るか、先づそれを擧げて見よう。

大西郷が、明治十年の西南戰爭で、最期を遂げられた時は、まだ五十二歳であつたから、若し此事なく過ぎたならば、猶ほ我國の爲めに、大いに盡されたことであらう、と考へると、如何にも其死は、惜むべきの至りであつた。

世界には、偉いといふて、褒められる人も澤山あるが、必ず其半面には、反對の批評が伴ふものである。然るに、大西郷に限つては、さういふ事がなく、誰れでも、偉いと云つて、感服して居たのであるから、よく〳〵偉かつたに違ひない。

多くの人が、偉いといふから、どれほど偉いかと思つて、さて會つて見ると、さほどでない人がある。又、多くの人が、ひどく惡くいふから、そんなにつまらない人か、と思つて、會つて見ると、存外によい人物もある。

要するに、人に對する批評は、その批評をする人の、立場と性格の相異から、起つて來るものが多いから、さういふ事にもなるのだらう、と思ふが、大西郷に對する批評に限つては、どういふものか、さうした事が更にないのだか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ら、實に不思議と云ふ外はない。

前年のことであるが、頭山滿翁に對して、或人が、

『西郷先生の死なれた時に、あなたは、どういふお感じがありましたか』

と、尋ねた時に、頭山翁は、例の態度で、ムズ〳〵して居たが、暫くして、

『千年も、二千年も、年を經た神木が、根元から折れて、どツと音のした時のやうな感じがしたよ』

と答へた、といふ事を聞いて居るが、流石に、外の人とは違つて、翁のことであるから、言葉少なに、巧い事を云はれたものだ、と思つて、僕は、非常に感心したのであるが、此短い言葉の中に、千萬無量の意が含まれて、大西郷の偉大なる人格が、彷彿として居るではないか。

又、豐後の竹田から出た人で、小河彌右衞門一敏といふ人があつた。此人は、廣瀨中佐の父、武重と共に、佐幕派に傾いた藩論に反抗して、勤王の大義を唱へ、それが爲めに、入獄の憂き目を見たが、後には勅命に依つて、獄から赦され、維新の事に從つた人であるから、當時の事情を調べて居る者には、相當に知られて居る人であつた。

けれども、大久保利通と氣の合はなかつた爲めに、その出世は、泉州の堺縣令が行止りであつた。

此人の、先生を批評した手紙が殘つて居るから、其一節を揭げてみよう。

今夜深更、薩州より大島三右衞門、村田新八、二十二日に森山一同に、又々白石家にて面會致候。大島は、元西郷吉之助と云ふて、彼の月照と一旦海に投じ候得共、引上げられて蘇生したる男にて、偖も斯る勇夫大膽の人、今の世に可有とは思ひも寄らざる程の人に御座候。

西郷、其後、菊地源吾と更名、今又大島三右衞門と改む、大島は極めて大事を成す人と奉存候。斯る勇士も有れば有るものと感服仕候。しかし猪武者にては無之候。

此手紙は、文久二年の頃に書いたものであるから、大西郷の年は、三十歳を出たばかりの時である。古人は、三十

にして家を成す、と云つて居るけれど、實は、その位の年頃には、まだ本當の人物には、爲り得ない者が多い。殊に昨今の人間を見ると、此感が深くなる。維新前後の人物は、啻に大西郷ばかりではなく、大概な者は、その年頃には天下の大事に當つて、相當の働きを爲して居たものである。けれども、大西郷の如く、一見して直ちに、相手方を感服させて、かういふ批評までさせる、といふ程の人物は、さう澤山には無かつたのである。

土佐の陸援隊長、中岡慎太郎といふ人は、又の名を石川誠之助と稱して、阪本龍馬と並び稱された人物であつて、阪本が遭難の砌、その場に居合せて、阪本と枕を並べて斃されたが、此人の、大西郷に對する批評の書面から、其一節を拔いてみよう。

當時、洛西の人物を論じ候へば、薩藩には西郷吉之助、爲人肥大にして、御兎の耍石にも不劣、古の阿部貞任などは如此者かとも思ひやられ候。

此人、學識あり、膽略あり、常に寡言にして、最も思慮雄斷に長じ、偶ま一言を出せば、確然人腸を貫く、且德高くして、人を服し、屢々艱難を經て、頗る事に老練す。其誠實、武市に似て、學識あることは、實に知行合一の人物なり、此則、當世洛西第一の英雄に御座候。

此書面の中、御兎の耍石とあるは、土佐の御兎といふ土地に居た、有名な力士である。又武市といふのは、例の半平太を指していふたのである。

又、明治天皇に永く仕へて、その學識と人格は、當代稀れに見るの人だといはれた、元田永孚が、嘗て大西郷に關する批評をした。それには斯う書いてある。

余、在薩之日、夙聞知南洲翁之爲人、後、相見於小倉軍營、歎曰、翁者振古之豪傑也、其胸、實脫洒死生之外、富貴貧賤威武不能移其志矣。

至復王政於千古、欲興海外萬國抗衡於中原、則其志膽之雄大、足以凌駕宇內也。所謂大丈夫者非翁而誰乎。

以上の批評は、すべて一見してから後のものであつて、永く交つて、よく其爲人を知つてから、批評したのとは違ふ。

而も其批評は、今日に至るも、動かすことの出來ぬ、立派な批評なのであるから、たゞ驚くの外はない。

しかし乍ら、大西郷と、最もよく相知つて、互に許し合つた人としては、勝海舟が第一番であらう、と思ふ。大西郷と海舟は、全然その立場を異にして、利害相反するの身であつたにも拘らず、相互にその腹の底までも知り合つて、乾坤一擲の仕事を、やり遂げた所に、面白味はあるのだが、その海舟の批評は、實によく大西郷の爲人を盡して居るから、それを引いて見よう。

俺は、これほどの古物だが、今日まで、西郷ほどの人物を、二人と見たことがない、どうしても、西郷は大きい。妙な處で隱れて、一向その奥行が知れない。

何事も知らない風をして、獨り局外に超然として居ながら、而も、よく大局を制する手腕のあつたのは、西郷一人だ。

世が文明になると、皆神經過敏になつて、馬鹿の眞似は出來ないから困る。

西郷に面會したら、意見や議論は、俺の方が寧ろ勝るほどだつた。けれども、所謂天下の大事を負擔するものは、果して此西郷ではあるまいかと、窃に恐れたよ。

西郷に及ぶことが出來ないのは、大膽識と大誠意とにあるのだ。戊辰之時、俺の一言を信じて、江戸城に乘込む。俺だつて、事に處して、多少の權謀を用ゐないことはないが、此西郷の至誠は、俺をして、相撲くに忍びざらしめた。

彼の時に際し、小筭淺略を事とするのは、却つて此人の爲に、腸を見すかされるばかりだ、と思つて、俺は、至誠を以て江戸城を受渡し、あの通り立談の間に濟んだ。

西郷の人物を知るには、西郷ぐらゐな人物でなければ不可ない。俗物にやア到底解りツこはないよ。

あれは、政治家や役人ぢやない、一個の高士ぢや。

古人は、棺を蓋うて名始めて定まる、といつて居るが、大樹の人は、死んでから後でなければ、その人物としての眞價や批評は、定まらぬものだが、獨り大西郷にあつては、此諺の必要もなく、まだ若い時分から、かういふ風に見られて居たのだから、どう考へても、偉い人であつたには違ひない。

此外にも、これに似通ふた批評は、多くあるけれど、殊に、島津齊彬が、松平春嶽へ、送つた書面のうちに、

『薩藩に、吉之助の在るは、猶ほ國寶あるが如し』

といふ事が書いてある位で、三百諸侯を通じて、第一の賢君と謂はれたほどの齊彬でさへ、斯くいふて居るのであるから、如何に西郷の人格が、すぐれて居たか、といふ事が、思ひやられる。

一

上野の公園へ、廣小路から三橋を眞直に渡つて、爪先上りになつて居るところを、俗に袴腰と謂つて、昔は、其正面に、例の黑門が在つた。今の石段を登り切つた所を、山王臺と稱したのである。彰義隊士の墓と、其前に、西郷隆盛の銅像が、建てられて在る。幾分でも、維新の歴史を繙いて居るものには、深い感興を起させるのが、此二つである。

憶へば、戊辰の歳、今から算へて六十年前の夢の跡、降りしきる五月雨の中を、眞一文字に、此山王臺へ攻めかゝつた、官軍の大參謀は、即ち西郷吉之助であつたが、討伐の策戦を廻らしたものは、長州藩の大村益二郎であつた。

この戰さが、其日のうちに片付かぬ時は、それこそ、由々敷き一大事になるのであるから、此點については、流石

の西郷も、容易ならぬ苦心であつた。それを承知の上で、大村は、此一戰を引受けたのである。

若し、此戰さが長引いて、日暮れにでもなつたら、江戸に住んで居る幕臣や、各藩の脫走兵士が、四方から火を放ち、その混雜に乘じて、上野へ馳付けるに極まつて居る。さうなつた曉には、勝敗の數、容易に量るべからず、或は全國の佐幕派と、薩長二藩にたいして强い反感を有つ諸藩が、一時に奮ひ起つて、容易ならぬ大事になつたかも知れない。

されば、大村の策戰は、どうでも日沒前に、攻落してしまはうといふのであつた。

從つて、彰義隊の方では、如何に惡戰苦鬪しても、日暮までは持ち堪へやうとして、必死の奮戰を續けたのであつた。

所が、大體に於て、幕臣は、順逆の名分から視て、大なる不利があつた。錦の御旗の向ふ所、六十餘州の草木、悉く風靡するの慨があつて、朝敵の名を受けては、如何に勇士揃ひの幕臣でも駄目であつた。

殊に、彼我の人數と武器が、餘りに隔絕つて居つた。假りに、東臺の地利が、守るに適當であつたにもせよ、要するに、あれ丈けの土地である。假令半日でも守れたのは、全く幕臣の粹を拔いた、彰義隊士の死守、奮鬪の結果と視る可きであつて、勝敗の分は、疾く判つて居たのである。

左樣した戰跡に、西郷の銅像と、彰義隊士の墓があるのであるから、苟も此處に杖を曳く者は、いづれも無量の感慨に打たれる。

また、九段坂の上、招魂社頭には、大村の銅像がある。これは、湯島天神の境內から、上野の吉祥閣に、火焰の臨るのを見て、思はず膝を打つて『先づ可し』といふた、其時の雄姿を、其儘に寫したものだが、遠く上野の森を睨んで居る、那の形に、何ともいへぬ餘情の籠つて居るのは、當然の事である。

西郷の銅像を見て、更に彰義隊の墓を見る。その間に、無限の感慨の起るのは、誰れにしても同じであらう。併し

人間生れて西郷ほどの大仕事を、やつて退けるものがあるにしても、その死後には、決して銅像なぞになるものではない。

時は、彌生の春、雪かと見紛ふ落花のうちに、大きな眼玉を光らして、集り來る士女を睨んで居る。無風流な銅像も、何となく詩趣を帶びて、慕はしいやうな氣も起るが、何時も、腰の邊りには、無數の紙屑が吹付けられて、頰や額にも、二つ三つは、附着いて居る。學生達の惡戯で、誰れの呼吸が一番強いか、といふ試驗に吹きつけるのだ。それに尙ほ甚だしいのは、女學生までが吹きつける。これは心に思ふ人と、添ひ遂げられるか如何か、鼻の頭なり額の上なり、自分の心に的とした所へ、巧く當れば此戀は成る、といふやうな謂で、戀の試驗に、紙屑を吹付けられる、といふに至つては、實に呆れ返つた話ぢやないか、千古稀有の英雄も、こんな目標にされては、迷惑至極であらう。

二

醫學の微臣から身を起して、後には陸軍大將近衞都督兼參議正三位といふのだから、唯それ丈けでも偉いものだ。けれども、世間にはよくある事で、饞倖の運兒とか謂つて、他の汗水流して、搗いた餅を、窃と手を出して喰ふ奴がある。それがまた、不思議と運が好くて、トン〳〵拍子に昇りつめ、所謂人臣の榮を、極めて居るものもあるが、どうして斯んなに昇進したのか、自分にも判らないから、況して、他人に判らう筈もなく、有りもせぬ家系や履歷をつくつて、胡麻化して居るものさへあるのだから、世は種々だ。

併し、西郷はそんなのぢやない。

永い年月の間には、意外にも他から押付けられた功名もあらうが、その代りには、また迷惑千萬な寃罪もあらう。兎に角、その一生を通じて波瀾の多い、且つ興味のある履歷に富んで居るものは、維新の功臣としてはこの人が第一である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

それに政治だとか、戰爭だとかいふやうな、世間並のことに離れて、裸の人間として見て、この位偉い人は、ひろい世界にも多く其比を視ない。

敢て自ら求めずして、他を牽付ける力を持つて居るのは、所謂英雄の上乘なるものである。學んで其處に至るのも偉いが、自然に其德の備はつて居るのは、一層尊いと思ふ。西鄕の自然に持つて居た德、卽ち他を心服させて、何となく、慕はしいやうな氣を起させるのは、それが更にわざとでなく、自然にさうなるのだから、一度信じて服從したものは、一生を誓ふといふやうになつて仕舞ふのだ。明治十年の擧兵に、一萬八千の子弟が、この人の爲めに、生涯を犧牲にしてしまつたのだから、實に驚入る。

縱令、その裏面には、新奮思想の衝突や、時代の刺激を受けて、無謀の兵を起したのだ、といふやうな、非難も聞くが、兎に角、一人の動きに由つて、二萬の勇士が集まるといふ、そんな事が、容易にあるものではない。

今の世に、多くの政治家があり、また大きい實業家もあるが、みな豪さうな面はして居ても、生死を共にするといふやうな立派な覺悟の乾兒を持つて居るものが、果して、幾人あるだらうか。乾兒はさて措いて、偕老同穴の契りある管の妻君でさへ、その點になれば、頗る疑はしいのである。星亨が死んで、その乾兒が、墓前に庵室をつくり、一年間墓守をした、といふ丈けでさへ、世間の人は、事珍らしさうに、語り傳へて、當代の美談としたではないか。是等のことに比べて考へても、西鄕は、慥かに偉人たるに相違ない。

天の一方に、怪しい星が現はれると、忽ち西鄕星の名が附く。露西亞のニコラス皇太子が來る、と聞いて、西鄕が供奉で來る、と傳へられた。明治十年に、城山の露と消えた西鄕が、更に十五年も經つてから、出て來る譯がない。けれども、西鄕は死んで居らぬ、といふ信念が、却々弘まつて居て、下層の人は、之れを深く信じて居たものだ。これは偏に、生前の德望なるものが、死後に迄も、長くつゞいた證據で、謀叛をして逆賊の名を得たものが、これ丈けの人氣を占め得た、といふのも、畢竟は、西鄕の人格が高かつたからである。自分の愛子が、その戰爭で討死して居

るのに、それでも、西郷先生は偉い、といふて、少しも怨みとしなかつたのみならず、却つて西郷の無事生還を望んだ、といふのは、千古を通じて、多く無い事である。

四

西郷が、ニコラス皇太子の供奉をして、歸つて來るとの評判は、日に益々高くなつて來た。時は明治二十五年で、國會が開けてから三年目だ。然るに、こんな馬鹿々々しいことが、遂に問題となつて、果は、相當の資格ある人までが、小首を傾けるやうになり、蠣殼町の相場師は、これに就いて、眞僞の賭をする。東京の市街は、この噂で持ち切つて居た。

兩國橋に近い、横山町の或大店で、土藏の建前があつた。出入の職人は三四十人、消防夫もあれば大工もあり、左官は勿論のこと、その賑かなことは一通りでない。午後の煙草憩みに始まつたのが、例の西郷生還論であつた。勇俠の消防夫は、頻りに西郷樣の生還を主張して居るが、固より證據も理窟もないのだ。

『西郷樣ほどの豪え人が、何で討死なんかするもんか、政府にしたつて、滅多に殺すもんぢやア無えや』

といふのが、生還論の本旨であつた。

『オイ、頭ツ』

呼びかけたのは、左官の親方だ。

『何でえ』

『何でえぢやア無えや、そんな事を言ふと笑はれるぜ』

『何ツ、何を誰れが笑ふのだ』

『何をツて……死んだ西郷が、歸えつて來る譯は無え』

『死んで居りやア歸えらねえが、生きてるんだから歸えると、言ふのだ』
『ハツハ、、、、西郷が生きてるツて、何うして生きてるのかね』
『何うしてツて、生きてるから生きてるんだ』
『それやア理窟が合はねえ。西郷は、討死して居るのだ。朝廷樣の帳面にも、さうなつて居るのだ。今更ら生きてるなんて言つたツて、そりやア獸目だ』
『獸目たア、何だ』
『獸目だから、獸目だツて言ふのだ。ヘン、箱根から東に、幽靈と化物は、無え筈だ』
『オヤ、この土揑奴ツ、妙なことを吐かしやアがツたな。幽靈たア誰れのこツた。化物たア誰れのこツた。さア、それを吐かせツ、返辭によつちやア勘辨しねえぞ』
『誰れツて、そりやア、西郷のことだ。死んだものが歸える譯が無えぢやねえか。もし歸えりやア、それこそ化物か幽靈だ』
『コン畜生ツ……』
氣早の消防夫は、左官の親方に飛びかゝつたが、親方も、負けては居ない。
『何だ、この青二才奴ツ』
と立上つた。
今迄は、この論判を、面白さうに聞いて居た連中も、、、、まさかにと思つてるうちに、喧嘩の花が咲いたので、ひとしく總立ちになつた。
『きヤツ』
と叫んで、親方が倒れた。

見ると、消防夫は、鍬を持つて、立つて居た。親方は血だらけになつて、呻吟つて居るのは、その鍬でなぐられたのである。さア騒動は大きくなつて、店の旦那も出て來れば、醫者もかけつけた。療治は屆いたが、却々の重傷である。その場は濟んだが、翌日になると、警察沙汰になつた。双方を取調べると、前の通りの次第で、實に無邪氣なことだから、署長も、此處分には窮した。

この時の署長は、大庭知榮と謂つて、顏を見れば、髯ムシヤの鐘馗面だが、生れは生粹の江戸ッ子で、元は、植木屋の職人であつたが、遲卒から仕上げて、署長に迄、昇り詰めたといふ、變り者であつた。これが若しも、普通の署長なら、消防夫を、牢へぶつ込んでしまふのだが、この連中の內情を、よく知つて居る大庭には、それが出來なかつた。

そこで、種々苦心の末、若者の家へ使ひをよこした。大至急相談があるから來てくれ、といふのであつたから、著者は、早速駈けつけると、大庭は、此事情を打明けて、是非仲裁をしてくれといふのであつた。幸ひな事には、どちらも著者の知つて居る人であるから、示談は、すぐに運んで、消防夫からは詫證を出して、それを著者が、預かる事になり、又大庭が、治療代五圓を出して、僕も五圓、本人からも五圓出させて、都合十五圓を、親分に渡して、これで愈々示談は濟んだが、著者は、大庭の精神が、實に嬉しく思はれた。此人は、後に日本橋區長になつたが、死ぬ迄續いて、勤めて居た。

斯うした逸話もあつて、西郷生還の噂は、それからそれへ傳へられた。ニコラス皇太子は、噂の通りやつて來たが、西郷は、終に影も見せなかつた。

僕が、初めて南洲傳を書いた時、畏友福本日南は、拙著に對する、紹介の辭となす可く、左の如き一章を寄せられたから、茲に改めて掲げる事にした。

昔者楚相孫叔敖、楚王を輔けて天下に覇たらしむ。後世王を稱して五覇の一と爲す者は、實に叔敖の力なり。既にして叔敖死す。其子窮困して薪を負へり。優孟之を憐み、卽ち叔敖の衣冠を着け、拙掌談論すること一歲餘、宛として叔敖の如し。一日楚王置酒して大會す。優孟衣冠を整へ、前みて王の壽を爲す。王見て大に驚き、叔敖復生したりと爲し、用ひて相と爲さんと欲す。優孟辭して曰く、楚相は眞平御免なり。叔敖の相たるや、忠を盡し、誠を容れ、王以て覇たるを得たまへり。今叔敖死して、其子は貧困薪を負へり。必らず叔敖が如くなるならば、自殺するには如かずと。因りて忼慨歌を歌ふ。王聽きて立ちどころに感悟し、乃ち叔敖が子を召して、之を寢丘に封じたりと。今に至るまで傳へて以て美談と爲せり。

西郷南洲は不世出の英雄なり。予嘗て之を論じて言へることあり。曰く、

『陛下は天授、人力の能く及ぶ所に非ず』との語に當る可き人を思へば、明治の天地、獨り、西郷隆盛あるのみ。大凡人の豪とせられ、偉とせらるゝは、概ね多少の事業を成し、功名を立てたる後に在るも、西郷に至りては則ち然らず、其の茶坊主たるや、島津齋彬早く之を器とし、滿城の健兒夙に之を畏る。其の出でゝ四方に遊ぶや、海內の志士皆之を敬へり。水戸の藤田東湖は傲岸にして人に許可せざるの士なり。然も一見して豪と爲せり。豐後の小河一敏は有志の士なり。文久の初之と會するや、其日記に筆し『初て三右衞門に面會するに、勇威逞しく、贈略世に勝れたるさま、斯る人の今の世に在るべしとは思はざりき』といへり。石見の福羽美靜子も亦庸人には非ず、其の始めて西郷大久保を見たる際の感想なりとて、嘗て予に語りて曰く『美靜が讀みたる千卷の書よりも、大久保が讀みたる十卷の書用を爲し、大久保が讀みたる十卷の書よりも、西郷が讀みたる一卷の書用を爲す可きを思ひたりと。其人となりの如何も、亦以て想見す可きなり。

慶應の末年、幕府の紀綱頽廢したりと雖も、尙三百年、十五世、積威の在るあり。勤王の公卿諸侯より、草莽の

志士に至るまで、頗る討幕の成功を疑へり。是に於て朝廷密かに西郷、大久保、小松、木戸、廣澤等を召し、勅して其意見を問はせらる。西郷對して曰く『成算疑なし。只だ宸斷を待つのみ』と。事乃ち決せり。既にして退くや、大久保以下交々問て曰く『公何の成算ありて、奉答則ち然るや』と。西郷曰く『有ること沒し』一座色動く。西郷曰く『我黨多年勤王を唱へ、肝膽を國事に摧くものは、今日あらんが爲には非ずや。今忝くも勅問に對す。宸斷を請はずして何をか爲さん』と。維新中興の大業は實に此奉答に定まれり。此他廢藩置縣の擧の如き、木戸之を策せりと雖も、西郷の一諾を待ちて、始めて決定したる、人々の知れる所の如し。

予又之を福羽子に聞く。維新の初、子は西郷と朝に在り。一日西郷從容として語りて曰く『人皆王政の復古と言ふ。復古乎。復古乎。王政の昔、三韓は、我版圖なりき』と。明治六年西郷の廟堂に在りて、征韓の議を主張したる、業に已に偉とするに足りて、而も此議を懷抱せしは、一世聵々、國政の統一をすら危疑したる維新の當時に在りしを思へば、更に偉として又大とせざるを得んや。

南洲逝きてより茲に三十四年、一世の風潮は滔々として智巧に走り、謂ふ所の明は秋毫の末をも察して、輿梓の大を睹ざる者、比々皆是ならんとせり。梅園翁が微辭諷し得て妙なり。其辭に曰く、

『餘りにも瑕あらせじと思ふより、小さくなりぬ可惜眞玉は』

と。是れ豈此本國の爲に、寔に可惜々々しき事には非ずや。

仁太君痴遊は其れ今の優孟なる乎。國人の梶ね楚王となりて、我孫叔敖を忘れんとするを慨し、即ち南洲の意氣を學び、抵掌談論するもの茲に數歲。乃ち其語を裒めて、本傳を立つ。之を綴けば、南洲恍々、我前に在すが如し。國人幸ひに之に感悟せば、南洲の再生、其れ庶幾す可き歟。吁、後の南洲其れ庶幾す可き也。

日南學人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.